

漢法苞徳塾資料	No. 006
区分	治療論
タイトル	痛みの診察と治療
著者	八木素萌
作成日	1989.09.10

『素問』拳痛論第 39 には、症状から見て十四種類の痛みを記述し、それぞれの病理を論じている。この十四種の内、一種類が「熱」によるものとされ、他の十三種類は「寒」によるものと記述されている。

「寒気経ニ入りテ稽遅スレバ泣リテ行ラズ 脈外ニ客スレバ血少ク 脈中ニ客スレバ氣通ゼズ 故ニ卒然トシテ痛ム」と認識している。つまり経脈における「気」や「血」の行ぐりが「寒気ノ客」の為に、或は「渋り」、或は「血少」となり、或は「氣不通」となる、等の為に痛むと言うのである。

更に十四種類の痛みの病理を詳述しつつ「脈急し」「脈相引」「小絡を引き」「小絡急引」などの様に表現している。つまり「経脈」や「小絡」が「ヒキツレル」事になるから「痛み」を覚えると言うのである。これは「痛みにはそれに関連するスジのヒキツレ（キョロキョロ・ゴリっとしているものなど）があり、それを見付け出して緩めてやれば、痛みは消えているものだ。」と言われる臨床的な事実と符合している。

『素問』の「痺論第 43」や「痿論第 44」は「拳痛論第 39」と密接に関連していると見られるが、〈痛→痺→萎〉と言う病態の変化を見据えている様に解釈出来る。〈凝り→痒→痛〉と言うシェーマ、あるいは〈痒→凝り→痛〉と言うシェーマが臨床上からは成立すると見られるので、痛みの性質を判断する方法は重要な診察技術と言えよう。

◆以下において「拳痛論第 39」の記述を検討しよう。

1. 其の痛み卒然と止むもの

多くの註家は、暖めてやればすぐに痛みが止まってしまう治癒してしまうもの、と解釈している。恐らく温めた掌で緩やかに撫でさすってやったり、「滑気鍼」や「陽気補鍼」や「陰気補鍼」を、或はそれらの混合手技を局所に施術する程度で容易に治癒してしまう痛みを指しているものであろう。

2. 痛み甚だしく休まざるもの

休む間も無くヒッキリナシに痛んでいる病状で、1. の病状がより重いものであり「因ハ重ネテ寒ニ中ルトキハ痛ミ久シ」と記述される。これは温め按ずれば緩解するが、1. よりも治癒するのに時間をするものである。この 1. と 2. とは「寒気」が「脈外」に「客」した為に「脈」（＝経脈のこと）が「寒」え、その為に「脈」が縮蹙（チジコマリ、ウズクマル）することになり、その経脈のヒキツレが「脈外」の「小絡」に現われて「小絡」も引かれるので「卒然」（ニワカニ・急ニ）痛むのである。従って温められれば痛みは容易に止むと説明されている。

3. 痛み甚だしく按ずる事が（拒否するから）不可能なもの

これは「経脈」に「寒気」が「客」し、これに「炁」（＝熱・陽気）が薄迫（セマッテ争ウ）し、経脈が「満」（＝腫脹）して痛むので到底そこを按ずる事など不可能である状態と説明されている。この状態はたんに按ずる事が不可能な状態であるのみで無く、強いて按ずると「邪気」が内攻する。「脈満」と言うのは経脈が充填状態になり「大」（＝腫満）する事であり、それは血気の乱れている事をしめしている。だから按ずると邪気を内攻させてしまう状態なのであると「王冰」が註している。

4. 痛みは甚だしいが按じると痛みは減衰して止まるもの

これには2種類がある。

一つは「腸胃之間・膜原之下」（腹腔の管腔の外の大小網などの組織を指す？）に「寒気」が「客」して「小絡」が「急引」（ヒキツレル）した為に起こる痛み。

もう一つは「背俞之脈」に「寒気」が「客」して経脈の機能が「泣」し（＝瀯る）、その結果そこが血虚になって痛みを発生し、心と相いに引き合って痛むものである。「腸胃之間～」の痛みが按ずると止まるのは、「血不得散」の為に「小絡」の「急引」を来たした為の痛みであるから、按ずる事によって滞っている「血気」が「散」じるためであり、「背俞之脈」（王冰は心俞の事であると註している）の痛みは按ずる事によって「熱気」「至」るので（血虚は冷えるから其処が熱を帯びれば血行も改善されて）痛みが止む事になる。

此のふたつの場合は血行障害であるが、ひとつは血行の停滞、もうひとつは血行の不足であり渋滞である。

5. 按じても痛みに変りがなく無益であるもの

「寒気」が「俠脊之脈」に「客」すると、この経脈は深部に有るために按じても効果を及ぼすことが出来ないから按ずる事は無益なのだという。王冰は「俠脊之脈」は「督脈」のことで「督脈ハ脊裏ヲ太陽ハ筋ヲ循ッテオリ 筋ヲ按ジテモソレハ筋ニ及ブダケデ督脈ニハ及ビ得ナイ」旨を註している。

『素問』骨空論第60の督脈の記述は脊柱の中を走行しているとも解釈出来る。『靈樞』経脈第10は督脈の「別」脈を記述している。この別脈の走行は今日の華佗の脈の所と推論できる。「俠脊」は、『俠』が原義のままに用いられているのであれば陽を総統する脈の意味となり、ハサムの意味に用いられているなら督脈の別絡の脈の意味になる。脊柱の腹側には腎の経筋と任脈の体奥を行く部分が走行している。督脈の主治穴が「後谿」である事や「陰交」の効果が高いことなどの臨床的な側面なども、この記述を考える上で大切な問題であろう。

6. 痛みを触察すると「喘動」が手に感じられるもの

衝脈に「寒氣」が「客」した場合には、衝脈が「関元」に起こって腹を上行する（腎脈と並んで上行して咽喉に合っする）ので、脈不通になると気が「因之」（王冰は氣因之謂衝脈不通足少陰氣因之上滿と註する）ので「喘動」が手に応じるのだと記述されている。衝脈は「十二経の海」とも「血の海」とも言われる奇経である。この経脈が「不通」の状態と言うのは放置して置けない。まもなく血が十二経脈に行らなくなっていく事に及ぶ。そこでこの経脈と平行するのみではなく「元氣」「精」を蔵する腎の経脈である足の少陰、陰の「枢」でもある腎経が、ただちに呼応するのであろう。その腎機能が動員された姿が二つの脈が合っする「咽喉」に表現される。腎はまた呼吸の「吸」を主っているから、「氣因之」にはこのような奥行の深い含意があると解釈しなければなるまい。従って此処に言う「喘動」とは呼吸状態の兆候と言う事になろう。

7. 痛みが心と背中とに相互に引き合う様に表現されるもの

「寒氣」が「背俞の脈」（王冰は心俞と註す）に「客」するとこの俞は心に注いでいるから、「背俞の脈」が「血虚」になってこの痛みは心と背中に引き合って現われる。「経脈」の「血虚」による痛みであるから按じて「熱氣至」れば、消失して行くものであると述べられている。

8. 脇肋と少腹とが相互に引き合う様に痛むもの

「寒氣」が「厥陰之脈」に「客」したものである。「厥陰之脈」は陰器を絡い肝に繋がっているから、「寒氣」が「脈中」に「客」して「血」が「泣」するので「脈」が「急」（ヒキツレル）する、その為に脇肋と少腹とが牽引しあうのである、と言う。脇肋には厥陰肝之脈が布散し注いでおり、また風木の病邪や臓腑の反応が現われる部位でもある。

9. 腹痛してその痛みが陰股に引いて現われるもの

「厥氣」が「陰股」に「客」すると、それと共にある「寒氣」は「陰股」の上部に位置している「少腹」に及ぶ。一方「厥氣」の為に「陰股」は「血」の「泣」を起こした状態にあるので、腹痛が「陰股」に引く現象を現わすのである、と記述されている。

10. 痛みが宿昔（長く古く客すること）して「積」となるもの

この痛みは「寒氣」が小腸の「膜原之間絡血之中」（腸壁とそれを養う動静脈叢を指すものか？）に「客」して「血泣不得注於大経・血氣稽留不得行」（血泣リテ大経ニ注グコトヲ得ズ・血氣ハ稽留シテ行ルコトヲ得ズ）（王冰は血が寒氣の為に凝結して積になって行くものと註している……血が凝滞するので組織を栄養する大切な機構を機能させられなり血の停滞は固定的になるので～）そして「宿昔」して「積」（今日言うところの腫瘍であろう）に成る、と記述されている。

積：（『難経』五十五難に・氣ノ積スル所ヲ名ズケテ積ト曰フ～積ハ陰氣也 其ノ始発ニ常処有リ 其ノ痛ミハ其ノ部ヲ離レズ 上下ニハ終始スル所有リ 左右ニハ窮クル処アリ・と記述されている）

1 1. 痛みの為ににわかに意識を喪失し、暫らくすると意識を回復するもの

「寒気」が「五臓」に「客」するので「厥逆」と成って上に気を泄らす。陰気は枯渇し（臓が犯され厥逆して泄れて行くから）陽気は「未入」（未ダ入ラズ）（陽気は体に入っている状態で体が働けるので）と言う状態にあるから「卒然」として「痛死不知人」{痛死シテ人ヲ知ラズ}と言う事になるが「気復反則生矣」{気復反スレバ生ズ}（陽気が戻って体に作用すると意識は回復される）事になると記述されている。

1 2. 痛みの為に嘔するもの

「寒気」が腸胃に「客」すると「嘔逆」して「痛」ものであると言う、王冰は、胃腸に「寒気」が「客」しているので胃腸の陽気を下降させている作用が障害される、その為に気は「厥逆」するので嘔逆することになり、寒気によって痛む（胃腸の気機が阻害されているから）と註している。此処は明らかに胃腸の冷えによる痛みと嘔逆（吐き気・嘔吐・からえずき・吐き戻し）である。

1 3. 腹痛して下痢するもの

「寒気」が小腸に「客」したもので、小腸では「聚」（五十五難に一聚ハ陽気ナリ～陽浮シテ動～気ノ聚マル所名ズケテ聚ト曰ウ～聚ハ六府ニ成ル所ナリ～聚ハ陽気ナリ其ノ始メテ発ルヤ根本上下無ク留止スル所無ク其ノ痛ミニ常処無シ―とある）になる事はないから下痢となるものであると記述されている。

1 4. 熱が小腸に留滞して痛みかつ便秘してしまうもの

（小腸の瘴熱が便を焦渴させるので便秘する事を記述しているが、熱とは消耗性の熱・黄疸の熱・オコリ〈マラリア＝瘧〉の熱・等の意味あり、此処では小腸性の高熱を指している）

◆以上の14種類の痛みの区分は、病因的には（14）の場合のみが「熱」であって他のものは全て「寒気」つまり「冷え」である。また（9～14）と（4）及び（6）の八種類は腹部の疾患に関係した痛みである。（1～8）まで（4と6を除く）の六種類は、経脈の内または外に「寒気」が「客」して或は小絡がヒキツレる反応や、或は「脈満」となったり、或は経脈で「寒気」と「炁」が争うために経脈が「充大」となって「血気」を「乱」すもの、或は「血虚」になるもの、など等となっている。この「举痛論第39」の他「刺腰痛第41」・「痺論第43」・「腹中論第40」・「厥論第45」などその他にも痛みの診断と治療のうえで重要な記述が少なくない。『靈枢』の諸編にも重要なものが多く、『難経』57難（五泄）・60難（頭痛と心痛）・55難・56難（積聚）も大いに関連する。詳しく研究する必要がある。また後代の医書には発展があるから研究しなければならない。

註 『靈枢』百病始生第66の「伏衝の脈」の記述や「陽明の脈」或は「腸胃の募原」に邪が客する場合の記述、『素問』腹中論第40の記述など、多くの関連した記述があるので、痛み（腹部の）の検討に際して、この際に関連させた研究が望ましい。

◆以下に臨床的な整理を試みる、種々の分類が可能である。

- a. 気虚の痛み
- b. 気実の痛み
- c. 血虚の痛み
- d. 血実の痛み

- ア 衛分の痛み
- イ 気分の痛み
- ウ 榮分の痛み
- エ 血分の痛み

- あ 皮毛腠理の分の痛み
- い 血脈の分の痛み
- う 筋肉の分の痛み
- え 筋の分の痛み
- お 骨の分の痛み

- A 気鬱による痛み
- B 飲による痛み
- C 痰飲による痛み
- D 瘀による痛み
- E 湿による痛み
- F 火による痛み

- 1 風寒痛
- 2 湿寒痛
- 3 風熱痛
- 4 燥熱痛
- 5 湿熱痛
- 6 燥寒痛

これ等の他に、痛みの程度による分類・孫絡、絡、經、血脈、經別、經筋による分類、治療法との関連による分類・虚性、実性に従う分類その他が可能である。

◆痛みの立体的な把握の必要性

- 1…自覚症状の程度を段階的に区分して把握する必要がある。
- 2…病因論的に弁別した把握が必要である。
- 3…病位論（三陰三陽と衛・気・榮・血および上中下の三焦そして五体論的部位）的な弁別が必要である。
- 4…証名を樹てる場合には、選択すべき治則を示唆したものであることが望ましい。

◆治法との関連について

▲痛みは、気または血が、或は滯り、或は滞り、或は鬱滞し、または鬱滞が腫熱となり、或は気虚となり、或は血虚を起こして、いるものである。然も、それは、皮部・孫絡・絡・経筋・経・臓腑の系絡などで機能不全が生起しているために痛むのである、と言うのが漢法医学における認識である。

▲循気・循血・散気・散血・滑気・滑血・引気・引血・瀉気・瀉血・斂気・斂血・補気・補血・などなどと命名されて来た鍼灸の手技がある。また燔鍼や・日本で創始された打鍼の他に病に応じて九鍼が制定されていて、多彩な対応が可能である様に確立されている。

- a. 撫擦すると効果があるもの
- b. 按摩・マッサージで効果があるもの
- c. 指圧して効果があるもの
- d. ストレッチで効果があるもの
- e. オステオパシーや操体法が効果を現わすもの
- f. 運動療法が不可欠なもの
- g. 矯正操作が不可欠なもの
- h. 暖めれば効果を現わすもの
- i. 知熱灸で局所的な発汗が必要なもの
- j. 焼灼灸が必要なもの
- k. 燔鍼が卓効あるもの
- l. 一般的な知熱灸で良いもの
- m. 透熱灸が良いもの
- n. 冷湿布が良いもの
- o. コールド・ジェットが適当な状態
- p. 刺鍼と各種治療法の併用が必要なもの
- q. 施灸と各種の治療法を併用することが適当なもの
- r. その他

▲これ等の療法は相互にオーバーラップする

既に『素問』と『靈樞』には種々の状況や病状に応じた鍼刺・施灸の技法を明らかにしている。今日、これ等が十分に駆使されているとは言い難い、故に我々はこれを詳細研究し、必要な整理と選択とを行なって鍼灸の真価が発揮できる様にしなければならない。

資料

◆『素問』拳痛論第 39

黄帝問曰。

余聞善言天者，必有驗於人，善言古者，必有合於今，善言人者，必有厭於已。

如此則道不惑而要數極，所謂明也。

今余問於夫子，令言而可知，視而可見，捫而可得，令驗於已，而發蒙解惑，可得而聞乎。

岐伯再拜稽首對曰。

何道之問也。

帝曰。

願聞人之五藏卒痛，何氣使然。

岐伯對曰。

經脉流行不止，環周不休，寒氣入經而稽遲，泣而不行。

客於脉外，則血少，客於脉中，則氣不通，故卒然而痛。

帝曰。

其痛或卒然而止者，或痛甚不休者，或痛甚不可按者，或按之而痛止者。

或按之無益者，或喘動應手者，或心與背相引而痛者，或脇肋與少腹相引而痛者。

或腹痛引陰股者，或痛宿昔而成積者，或卒然痛，死不知人，有少間復生者。

或痛而嘔者，或腹痛而後泄者，或痛而閉不通者。

凡此諸痛，各不同形，別之奈何。

岐伯曰。

寒氣客於脉外則脉寒，脉寒則縮踈，縮踈則脉絀急，絀急則外引小絡。

故卒然而痛，得炅則痛立止，因重中於寒，則痛久矣。

寒氣客於經脉之中，與炅氣相薄，則脉滿，滿則痛而不可按也。

寒氣稽留，炅氣從上，則脉充大而血氣亂，故痛甚不可按也。

寒氣客於腸胃之間，膜原之下，血不得散，小絡急引，故痛，按之則血氣散，故按之痛止。

寒氣客於俠脊之脉，則深按之不能及，故按之無益也。

寒氣客於衝脉，衝脉起於關元，隨腹直上，寒氣客則脉不通，脉不通則氣因之，故喘動應手矣。

寒氣客於背俞之脉，則脉泣，脉泣則血虛，血虛則痛，其俞注於心。

故相引而痛，按之則熱氣至，熱氣至則痛止矣。

寒氣客於厥陰之脉，厥陰之脉者，絡陰器，繫於肝，寒氣客於脉中，則血泣脉急。

故脇肋與少腹相引痛矣，厥氣客於陰股。

寒氣上及少腹，血泣在下相引，故腹痛引陰股。

寒氣客於小腸。膜原之間。絡血之中。血泣不得注於大經。血氣稽留不得行。故宿昔而成積矣。

寒氣客於五藏。厥逆上泄。陰氣竭。陽氣未入。故卒然痛。死不知人。氣復反。則生矣。

寒氣客於腸胃。厥逆上出。故痛而嘔也。

寒氣客於小腸。小腸不得成聚。故後泄腹痛矣。熱氣留於小腸。腸中痛。

瘴熱焦渴。則堅乾不得出。故痛而閉不通矣。

帝曰。

所謂言而可知者也。視而可見奈何。

歧伯曰。

五藏六府。固盡有部。視其五色。黃赤爲熱。白爲寒。青黑爲痛。此所謂視而可見者也。

帝曰。

捫而可得奈何。

歧伯曰。

視其主病之脉。堅而血。及陷下者。皆可捫而得也。

帝曰善。

余知百病生於氣也。怒則氣上。喜則氣緩。悲則氣消。恐則氣下。

寒則氣收。炅則氣泄。驚則氣亂。勞則氣耗。思則氣結。

九氣不同。何病之生。

歧伯曰。

怒則氣逆。甚則嘔血及飧泄。故氣上矣。

喜則氣和。志達。榮衛通利。故氣緩矣。

悲則心系急。肺布葉舉。而上焦不通。榮衛不散。熱氣在中。故氣消矣。

恐則精却。却則上焦閉。閉則氣還。還則下焦脹。故氣不行矣。

寒則腠理閉。氣不行。故氣收矣。

炅則腠理開。榮衛通。汗大泄。故氣泄。

驚則心無所倚。神無所歸。慮無所定。故氣亂矣。

勞則喘息汗出。外內皆越。故氣耗矣。

思則心有所存。神有所歸。正氣留而不行。故氣結矣。